

岩田佳久

論文題目 世界資本主義の景気循環—クレマン・ジュグラーの景気循環論と
クズネツ循環—

審査委員 柴田徳太郎（主査） 小幡道昭 丸山真人
伊藤正直 大森拓磨

論文審査結果の要旨

氏名 岩田佳久

本論文は、景気循環論において一般的に中長期循環としてあげられる「ジュグラー循環」と「クズネツ循環」を世界経済的連関の中で読み直し、明確な方法で世界的な景気循環の運動を実証的に示すことを課題としている。

本論文の構成は以下の通りである。

はじめに

第Ⅰ章 19世紀英仏マネタリーオーソドキシシーにおけるジュグラーとその景気循環論

第Ⅱ章 ジュグラーの世界経済的枠組みとその実証

第Ⅲ章 世界資本主義としてのクズネツ循環論

終章

まず、本論文の構成に従って内容の要旨を示しておこう。

第Ⅰ章は、ジュグラー没後100年の2005年を契機に活発化したジュグラー研究の成果を踏まえて、ジュグラー景気循環論を19世紀英仏通貨論争の対抗関係の中に位置づける試みを行っている。そして、英仏通貨論争の対抗関係を読み解くことによって、ジュグラーが銀行学派として景気循環論における非貨幣的分析の立場に立っていたことを明らかにする。そして、ジュグラーに先行し、彼に大きな影響を与えたフランス・フリーバンキング派コ克蘭の周期的景気循環論とジュグラーの恐慌論との違いが、銀行原理の適用の違いにあることを解明する。コ克蘭は優れた銀行原理的信用論を述べながらも特権銀行と預金の理解では通貨原理を採用し、貨幣的恐慌論を主張した。これに対してジュグ

ラーは銀行原理に徹し、非貨幣的分析の立場を堅持した。非貨幣的分析の論者は実物的過剰投資論を説く者が多いが、ジュグラーは非貨幣的分析のまま、投機的価格上昇において生じる「相殺の欠如」から恐慌を説いた。その際、相殺の欠如が生じる必然性は、信用システムが発達し投機が進む英米仏などの地域（中枢）と、信用システムが未発達で投機が進まない地域（周辺）との価格上昇のギャップに求められた。こうしてジュグラーの恐慌論は、異質の要素から構成される世界経済の不均衡の論理として解釈された。

第Ⅱ章では、ジュグラーの為替分析を独自の実証分析によって再構成し、「中枢-中枢内周辺 - 周辺」という世界資本主義の異質な要素の多層的な相互関係を解明している。ジュグラーは好況末期に相殺の欠如から外国為替相場が悪化し金属正貨が流出し恐慌になると論じるが、あらゆる国で為替が同時に悪化することはありえない。そこでジュグラーは、信用システムの発達の違いから「中枢」と「周辺」に世界を分割する。だが、為替関係に関するジュグラーの実証分析には混乱があるので、整合的に再構成して実証分析を行い、次のような結果を得た。①中枢諸国の中央銀行バランスシートの循環的変動に関しては、金属準備と手形割引・貸出の逆相関、恐慌との対応関係について1830年代から1860年代までは同調関係が見られた。②周辺諸国の中央銀行（ノルウェー銀行）バランスシートの変動は、1850-1910年に中枢諸国と異質性、あるいは非同調性を示した。③イギリスを媒介とした金と銀の複合的な関係、フランスを媒介とした銀の国際的移転関係、さらに東洋銀世界への銀流出の重要性が示された。最後に、金銀複本位制の意義が論じられている。複本位制を金本位制に収斂していく過渡的なものであるという見方はイギリス好況末期の金流出という一国主義的観点に対応するものであると批判し、本章では最近の研究を踏まえて、1850-75年頃には金銀複本位制がそれ自体の根拠を持つシステムとして成立していたことが示されたと論じている。

第Ⅲ章では、実体経済における世界経済論としてクズネツ循環論の現代的意義が理論的実証的に解明されている。1950-60年代のクズネツ循環に関する議論は、20年という周期や建築という一変数のみを対象とするものではなかった。建築投資とその他の投資の交替、投資の国内外での交替、英米間の建築投資の逆相関、英米景気の相補関係＝「大西洋経済」説など、グローバルな視点で各系列が相互に関連・規定し合う景気循環論が提起されていたのである。この論点について本章は実証研究を行い、次のような結果を得ている。①1870年代後半～1900年代にイギリスでは「国内投資の高水準・対外投資の低水準」と「国内投資の低水準・海外投資の高水準」の交替が見られた。②投資交替説はアメリカでは1880年代前後には適合しない点があるが、1900年代前後には適合が見られた。③1979-80年までの現代アメリカ景気循環では投資切り替えによる長期

循環は見られない。だが、1980年代には好況中に住宅投資と事業投資の下落傾向が続き、2000年頃には事業投資の増加が急落に転じ住宅投資が増加する切り替えが起こった。④タイ・マレーシアとアメリカの投資には逆相関関係が見られる。③④に見られるクズネツ循環復活の背景は新自由主義に求められる。①投資の非固着性、②国際金融センターの安定性、③国際通貨金融体制、という三要因がクズネツ循環復活に貢献したと結論付けている。

終章では、これまでの章における実証研究の結果と主張が要約され、今後の課題が述べられている。

本論文の貢献は以下の点にある。

第1に、シュンペーターによる紹介以降、10年周期の中期的景気循環の提唱者として理解されてきたジュグラー像を批判し、恐慌の発生メカニズムを分析した論者として性格づけている。そして、通貨学派对銀行学派という従来の19世紀英通貨論争の二項対立の枠組みを、19世紀仏通貨論争を合わせて再検討し、セントラルバンキング派对フリーバンキング派という観点をもち込むことによって、二種類の二項対立の組み合わせに拡張している。この構図に基づきジュグラー景気循環論を銀行原理セントラルバンキング派として位置付け、非貨幣的景気循環論として再評価し、資本主義と非資本主義の世界的不均衡から恐慌発生を説く理論であることを明らかにした。この研究は、国内外の先行研究に対して、その総合性と包括性において独自性を有している。

第2に、為替分析におけるジュグラーの混乱を正し、独自の実証分析を実施することによって、中枢一周辺という世界資本主義の異質な要素の相互関係としてジュグラー景気循環論を再構成したことは高く評価できる。金銀複本位制がそれ自体の根拠を持つシステムとして成立していたことを明らかにした論理も説得的である。

第3に、クズネツ循環に関する諸学説を検討整理することを通じて、クズネツ循環が国内における性格の異なる投資の切り替えという側面と、国内投資と対外投資の交替という世界資本主義的連関の側面を併せ持っていることを明らかにし、第1次大戦前と現代の世界経済からこの両側面を検出することにある程度成功している。

このような成果の反面、本論文にはいくつかの問題点が存在することも指摘しておかなくてはならない。

第1に、第1章・第2章と第3章の関連が明確ではない。このことは、著者の景気循環論の全体像が明らかでないことと関連している。世界経済編成との関連については論じられているものの、ジュグラー景気循環論とクズネツ景気

循環論が理論的にどのような関係にあるのか、世界資本主義の発展段階（産業構造の変化、信用システムの発達）との関連については必ずしも明確に論じられているわけではない。

第2に、「貨幣的」と「非貨幣的」あるいは「実物的」という景気循環論分類の方法には疑問がある。この分類では、通貨原理によらない信用システムの能動性を評価する景気循環論（たとえば宇野弘蔵の恐慌論）は「実物的」景気循環論に分類されてしまう。また、「非貨幣的」と「実物的」の区別も曖昧である。

第3に、ジュグラー理論のサーヴェイはかなり錯綜しており、説得性に欠ける面が存在した。たとえば、銀行学派的であるジュグラーがなぜ主観的には英国銀行学派よりも『地金報告』（モデレート地金派）を継承していると考えていたのか、という問いに対する解答は、ジュグラーが『地金報告』を銀行学派的に読み替えていたというものであった。だが、この解答では問いに全面的に答えたことにはならないだろう。

しかし、このような問題点があるとはいえ、本論文に示された先行研究に対する批判的な検討と、実証的な研究の優れた成果は、著者が自立した研究者として研究を継続し、その成果を通じて学界に貢献しうる能力を持っていることを明らかにしている。したがって、審査委員会は全員一致で、本論文の著者が博士（経済学）の学位を授与されるに値するとの結論を得た。